

特
門へ13
3098
巻5

昭和九年
七月二十四日
購求

曙巻之四

のつゆのぬきくこまごとと教化けいせぶ兄弟の娘初心も大得道く
 隨喜の涙をきり剃髪受戒を願うれば常照阿闍梨なるのめさるごと
 なるひかり切松虫母の骨を拾集り昼飯の器をひき袋をかきく頭を
 かけいご律ひあつれといふあま阿闍梨兩人が手紙をうけて山を下り大谷
 の葦室ふりけいせぶ上人やうく兩人を剃髪せしめ法衣を与へ憐れ
 玉ひめあつるふ上人歸依の大旦那月輪の禪閣此夏末まじめりての
 哀ふかばあ人の幼女を扶持を与へ養玉ひめ建曆二年正月二十五日
 上人遷化のまゝまじも此幼女病床をこるまじと看病ゆるごと
 ○此両尼成長ふまじむ容貌養廉あり玉のまじありけれ観音
 勢至の化身と人くつひのひかり六時礼讃と上人の徒弟安
 樂とのひける僧經文のめくはくりふ太秦の善觀房ふ

つらむ定まき明ふさるる徒然の両尼あまきしつらむ鉦打ありしつらむ

洛中洛外を勸化しつらむ良歎悲喜の音曲めづしつらむたふさるる鉦打ありしつらむ

聴衆耳なまむと結縁さるりのおほくその色の妙なる松虫鈴虫と

ふもつるぶらりつらむ其名たつらむとて業今音のふたれ鉦を松虫と

難波名所記松虫案ふ今宮の辺松虫塚とつらむあり鈴虫の行方いう

のりつらむ松虫此所松虫来りつらむつらむつらむつらむの急松虫平のじつらむつらむ

松虫塚とつらむ又案松虫鈴虫松虫後鳥羽院の官女と云説松虫のり

づらむ是る松虫ん松虫後伏見帝の勅松虫つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

○又かの両尼松虫二人比丘尼松虫といひつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

人の著せる二人比丘尼松虫と云草紙松虫これおのつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

○又両尼母の骨松虫なむ松虫おのつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

第十五

櫻姫悲薄命二卧病

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

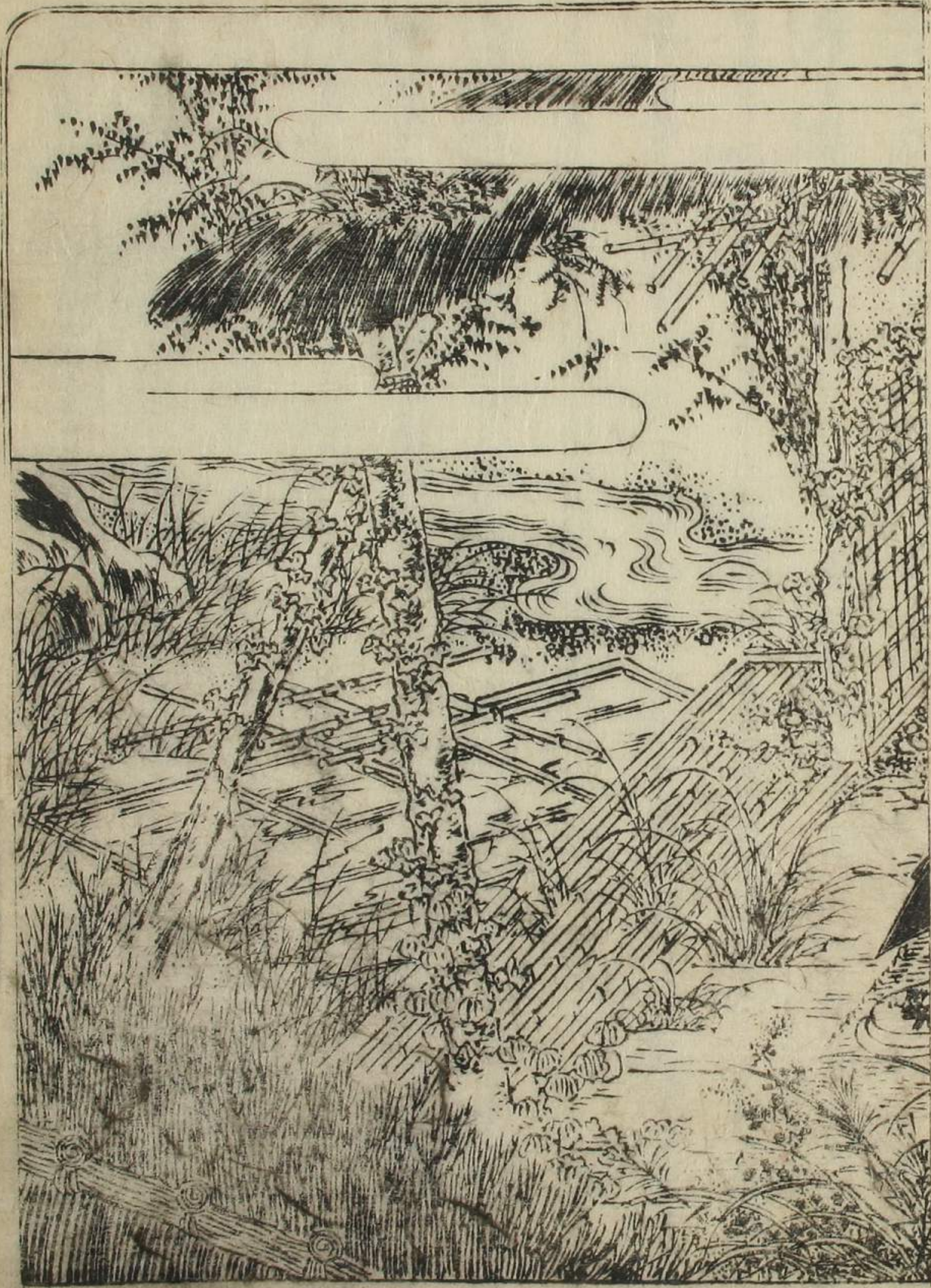
つらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむつらむ

かきあがりつひに両人を生捕高き小手ふくらつて茂林の裏に
さまさり揺ひめい頻に落涙し薄命を悲し山吹の齒とやと
後悔されども更におひは追人の者どりの兩人を中におき車座に
居あつて權休息しけるが一人のひりて我をたふすつけれ賞金を
あつて我ものあつて取べし一人がひりて我をたふすつけれ
そのひりて女の斬立られいちに出し逃しよふのうとや我
こそ女の捕へし第一の功あれといふ又一人が畢竟揺ひぬ捕へ
これ者こそ大功あり賞金ぬかひけるべし我ありといひて
つゞく残る者等口をひとまじ此に居者のつゞく此より勞せざる
賞金の配分は平等ふとべしあつていひて互に争ひなく同士打
しと大に騒動しけるこそ卑き世の折しと背後の大樹の影に

△
しう一箇の養男子明晃くさる刀を打ちつてとどり出追人等
散る小斬立られ其猛勢ふおそれ秋の木葉の散るく東西に
逃去りゆかの養男子やうく兩人のいまのぬきとれ地伏し
恭いひりて姫君の小子かえりてあはれは小子の御家士篠村八郎
公連が一子二郎公光とて者やうく十七年以前殿の御勘氣に
あつて浪の牙とありしうこれに席ふ尺しとけいふゆき
語りやとべし小子御謔ふりてこれまが苦辛はけり仔細なところ
のつゞく御勘氣の御赦免をねがひんと存立出する途中にて相公
信田平太夫が刺客の乃小打とむひ御家滅亡のはげや膽魂と失
ひて立ちぬる茂林の裏のさげさをあやまのめげより窺ふふ
かの者ども姫の御名ぬやせしゆえ御顔のうらみ侍しとていふ

とれと悟りかどりきこくもくひをりぬとのべけしとて様ひめさくく
あまのじ公光あくののちゆる危急の折汝ふのひに誠し神仏のたまけ
あつといひく疾びぬ山吹公光がそばりくもりめん身まぬん志
あありまの初りける時めん身といひまづけのり佐伯平弥二娘山吹
あくゆこの公光をたつとつと打ちのりいふもまうり昔とにそ
かちもかりりこればえあまらぬとて互ふとて物語一山吹
野分の方の行方とれどるもかちりて愁ひけし公光とる人
へ且姫の御文か中をむべと計をほ母君の御ゆるへを尋信田平大夫
か打く亡君ふ手向御家か再興とて此度大望まじく急いそ
とこびに小子今山州小野の里に住が貧しく姫を安んずべき
便はこれのいほりたれ難義うとつひと愁ひける時一羽乃

旭花来りて公光が懐のりぬ公光これを捕へ汝野鷹ふかれ窮
鳥懐ふるとたへ狩人もこれをとるごとく我くもかはさひの窮鳥あり
とて飛去とて放ちやりけるふ又花うりて懐小ふかくとる度
おびけしとてうりてとて頭金色小惣牙揃の色一と
尋常の旭ふあくと公光のけち三度まで我懐のり多とて不思
議あれちうら大内不旭合好せあふより公御殿上人まきと
それを愛玉ひ旭の價とるとる度古不倒は此旭代あまの
宝を得べこれまじく我氏神條村八幡の授ありのあめと
大小あび旭花懐あ山吹りも姫を守護一かの住家へ志
と飯とめ度東鑑ふと旭合の夏明月記見也やく公光家ふりかの
旭花賣り小果一のまこの金を得く大小あび少も私用あつたど



とのり
竹村二
山吹女と
小野の里
の芭屋小
櫻姫を
養



暁
卷之四

まぐ姫の夏あめりらかぬけ家の公光ちりら移り住の人の
 住のじら空屋なれば軒端かた壁くが月今もたあ人とあ
 たりりの旧家あ窓ふの蘿葛もひまもひ庭あ葎生茂板下も
 朽貫子も破も床の下より草生ぞの中くひせ住居なれば
 姫もあめりらぬらふおとらへかむそくおんかへどとらへ
 里ふきくやと家あ究竟の地なれば他所ふらり信田方りれ
 そこあんあまうめととひあ金のもあ家造りあへも
 安けとそれ人も人目立ぬらとひ一間の塵を払ひ屏風とあかこひ
 姫の身のやどりの調度なとらあぬらあべいとひとあめ
 来り暈綯緑の畳二畳小唐綾の褥をもち几帳衣架几火桶燈臺
 のたひは新したぬ用力朝夕まわらるる飯器のたひも螺鈿を

飴あぬらぬらぬらぬらぬら荒屋あ似もつらど香炉小香氣たえぬら
 かわり一室小さら天津乙女の賤が伏屋小天降らると疑風情ありつく
 のと一心の誠を尽し公光は日毎小出り野分の方の行方公尋山吹は
 とらぬらぬらぬらぬらはへなれば揺ひめ其志公感と袖をわりの日も
 ちりら別と夏夏の敷かぐねつれは片時も公慰る夏あく昼終日小
 らひらじ夜の八色の鳥と鳴明一何とぬべさ我牙やんと歎さるるこそ
 哀なれ公光の姫の愁らるるさるる公志のひと播磨小送り去る宗雄
 のぬら小のせやさるらうさぬも忘さ玉りんと山吹とわらぬひと
 その公支度しつら揺ひめ公地例あると悩煩ひぬれば兩人の
 大不驚さ枕方後方ふと良薬を用ひ神小祈り公を尽し

看病けり漸く小ぶらり日ふつれくたのこもけまくなりゆき
つひ小終馬期と見えけり山吹姫の額を撫おせおくる夏あけ
のこもへはとあるくついで扱ひめけ度いとも快氣のほほとわひく寛
悟しつとばいひのこもへさ夏まほかきつる文ありあうん後ふるよ館
逃しつる時も肌かたるるの観音の小像ハ母人へ香の色ハ宗雄殿へ
護刀ハ公光へひと麻子の小袖ハちちふふべいのちのやこもも
か一妻が此黒髪ハ曉ハ夜ハ養長ハ宝とまること玉の知りあうん
勝んかろさと彩衣とさせく粧を失ふ夏あけられまじく汝ちが公
一の敷くハ草葉ののびつて賞とべしといひさうり若死息の下ハ念佛
アともア脣のうぐくのもあうり絶ふ十七歳を一期とて南柯の
夢と醒してぬ嗚呼哀哉嗚呼痛哉此日ハこれいふまゝの日や飛
明老云四

二年八月某の日あり山吹水り姫の脣をまめしつむさうり
歎きつるがやありとせけりへは姫ハ手馴れりしより後一日片時と
ましまかりまされ夏は我身の年のつり夏あけとらとと生長ふへくと
の言さひく育まわす月日のごとく小作ごつるふ只今テハ目ごつる
夏のを憂さようて寝のねごめあも山吹くとおもひ御色の身ハ
底ハ止り只今の御姿幻ハかげろへ更ハ忘るべしとも覺をさうり命
生るるごとく千年万年を経べしや死出の山三途川を誰ハ渡し
べた思しとるおん不附とるまづ妻ハこそ尋玉のめ生くるも苦し
さ小姫の御供仕人といひも果ぞ氷を刀ハ抜とるらつて呪ふつた
たてんとする公光かどめ汝歎ののまりハ狂氣しつる野分の方
の御ゆるハ尋信田平太夫ハ打り御家を再興とるまづハ汝を

我も大切の命なり今死しく何のわひやめおとさぬぐ理ぬ尽されば
山吹やうく死とどまり公光ゆりとも野辺送りの支度しりせめてハ
御遺言いごころくふるく山吹ゆびく姫の屍を抱あげて
湯丸ひうせいける時のどく髪ぬそりのけ櫛并ぬさーやど画紅粉
とろり白綾の下がさし縷縷の緋の上著唐織の袷衣を著せられ
は生る時ふも多くと養麗あり柩棺をのりて屍をとさめ藤六とて
年老る譜代の家僕忠義の者少くけく家を尋ね来りく仕へ
居る公相人ふ公光いづる棺をあげ世なれぬる才されば日のうらぬ
まらくのりをれ寺小送行引導の語ぬ授けられり鳥部野の
茶毘所ふれ行く藤六とくじめ狼犬の遺躰と損ド盗賊の遺
財を窺を思れ公光いづる棺とより権下火の時とすらもれハ

藤六のいづく馳来り告いづく信田の家人等
姫君と奪とんと乱入一姫をおとせさるんと疑山吹様は
弘明とと引立去ぬ僕とめんと争けども敵がきて引止めぬ
く中追行くもむむ息もつさのへどひりれハ公光驚とと
とひりげと支よは下火の時此棺とまり居るといひか
花がくく小馳去ぬ

第十六

櫻姫甞生清玄枉死

柳島部野といふいはれた跡ハ朽とひく古々の人と稀なれと
よじふたがらど無常遷流く送る日もなけと末の露の
牽かかれとたがら煙常不絶と敷くの下の石もおやくハ苔小埋と
拂ふ人のりともるえぬのり幽魂夜月ハ死思魄秋風ハ嘯と賦

くもかる 刑とやひくんとぬくのりの死人の骸草深して露滋
くさりのくつふせれた荒野あついと哀なる所かり藤六の棺守りて
居るがとや下火の時つらとせの半鐘をまじけむ墓守の僧
不棺に渡し主人の才の上は氣づつひとくいとばいく弛ぬ此墓守の
僧の別人のす是乃清水の清玄がされる果て清玄清水は退去
しく所の方を迷ひのりたけが漸本心ふ立ちり此野の墓守とあり
く荒る菴に住日毎を送り来る亡者の下火の時つられば経ばよみ
十念に授け回向する夏なまりとるふ此時櫻姫の棺ともとるぞ
受取く己小煙とまどく例のごとく経よとく回向し十念に授け
つふつぐくものあついかとるふ十念なる色と清玄の中はけ迎ふ人も
また不行人の春のど草むつふととく虫の音くと疑つ又阿弥陀仏
とくもあれ阿弥陀仏とくも色平くかの棺の裏あり清玄益の中へ
ましつ棺の蓋をひくたかへるふあなつ月月の光ふとくこれいふ
日来慕つる姫小疑ひは病小月日をまめふや肉脱疲瘦の体あつ顔
色変せど唇は紅く玉鏡ぬあつとくなればとくもとるす
夢うつともつたすへど且驚且悲動情のびねて棺より出骸を抱き
くひくたれ我凡夫のめさはさけけ姫のをなく成果んといひと愛情の
念深く年来の修行をいほくせこそ悲しけれとふ久相の詩小男女
の嬉樂はと不臭骸と抱といひとるべあり人の皮はのく愛しく唯いつ
つらの姿あるををさうとどいづどの人々これのさうん茶毘所もかきさふ
我住此野小送と眼前新死相がえせく我執著の悪念を断とむる夏
ましくゆき因縁ありいとく凡情をととく正覚小歸とどこれどかたれ



花の姿をひさしく灰とまさんこ惜へく悲むべしといふも嘆ひも説雨
のこぼるる涙姫の顔かしくとかりく口ふつろが忽一息を出入
けきいまだまじひく菴室のうち小抱入身うちぬ按上薬丸口不入水
かたがたをみちらふづけく肌をぬめぬとぞ不ちぞのうく甦生こそ
得たり清玄一向夢のこらし姫をらひゆふくこそば極ひめ目かぞえ
のこられ君がさるるぬこく惘然とまじひ香煙ふふとがりぬ御仏母
しうひらふく冥途のうら女いつののれ某ころやせしと凍こ衆のりの
うー哀悲かたれむりれうーといひとさめぐと哭るゆ春の花の雨小慍こ
秋の草の露小沾る風情るふか清玄つとくと打まわり居けぬが俄小
一陳の冷風と吹清玄が身うち冷とあるとひくく忽心中恍惚として
再愛著の念か生れ姫の午ぬらうとひひくれへつじや極ひめおん身へ

大吉

我とえおるまに我の清水寺小住一清玄とり者さるひめつろが清水小
折我偶々とめくおひののまり病臥且夕の露命危なり月日
今たよりり彼所か迷ひ出てもあるひめの在所を尋り月日
丹波國桑田の長者鷲尾の息女あり極ひめといふうのれ
人のかぐるかばさうさふととたたら丹波小赴く尋らる小就鳥尾
の家亡姫のゆへられむとぞとわとんと力おちとぞも我をひかむげざれ
約束ありめとのさうめく前の月此菴室小移り墓守の賤身とまらつら
そく病がりやかく姿もかとうへぬ此所ハ則多部野の茶毘所なり
おん身死しけり時お送られ我介抱おひく甦生をれ夏宿縁の縁
さふのうどや此兩年哀迷ひく蝉のめけがの如き命ハ草葉
の露の中ふ消えんと悲おん人の死なぬりの情かけては極ひめとひ



とくさせむりんくわとひつ? 掌成合く拜の息は採ひぬたとらう
 新
 小ゆりへれ袖のくわさうかまうく彼がわりさぬぬるふ目へくむくとあら
 わりく頭ハ栗の毛迷のどくく月の垢もつりく? 糸の正体もあくと頭を
 うくと腹大ハ腰のりそとら水松のやうおぢれく恰飢鬼道の衆生の
 ことく殊更此菴ハ墓原の草津さうちならまらめくひせたとまひるれ
 物毎ふのやうくどとつふまは折しも茶昆の煙はくことららりのぢり臭氣
 鼻をかきとくく無常かためと空ふのぢれ香煙ハ悪鬼の口ハ吐くと
 ぶく風ハまぶく尾ハ化ハ亡者の人ハ招くことの中も只このかまわすと
 くと打とくわくく又も死ぬべとららり清玄もや姫も取とらうく
 かつくけくハ櫻ハ色ふるハ其志へうれハ且て毒ハ夫ものれは清くハ
 ちくくくく殊ハ少ハ少ハ少ハのくくくとまらひながくくくく織ハハ志ハヨ
 三

ヨ

りらあふのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 清玄ハ病後の足のかろく尻居小墮と倒しり姫ハひひすハ外のくくく走り
 人ともくく清玄とあらまがくくくくくくくくくくくく我日来哀慕つる念
 きた今日唯今いつでらむしくくくくくくくくくくくく戒行破阿鼻地獄
 小墮ともとも姫の息あふいと師の房の怨け世間小面ハむのぢれ
 又ともけりも皆是姫をさひハ也まありけくくくくく人の為るくくくくく
 身小報ぢややうくくくくくくくくくくくく起上りくくくくくくくくくく
 ともよれ腕も牙ハのくくくくくくくくくくくく倒せば合破と
 乃ふくくくくく解くくくくくく姫の帯ハ牙ハさくくく起とらうくくくく
 輪廻の紐打もくくくくく煩惱の大畜生道も目前なり清玄のうれ息を
 つくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

それ知まがうやくまがく執著もろく我まがうのこしつ過去生くの因果
どわ今ハ活ても死ても苦うもどいごく我執念をころさせよといひつ
つゆめがうけしと姫いといふおん瓜らぬの乾きおのひる小ちのこごとく
のづれがとあくええふけうこの折しも狐あぶおかりれらふや雉子の雌ひら
菴室のうらふ花入るるを清玄おひらへ日未修しと戒行をやあるをほし
これらよとくくるの生血をころしけり口のまらり朱ふとく顔色変り
眉をくく目をつりめけとくあつてとく光景の毛をばらむらり
かりぬえいとく又ふげつづ姫の振袖をひたすめあられとくおがそ
へらうはらう我おふとくけもめとく殺しと死出三途か
伴んどの小冥途のみもて手をとらうとく劍の山炎のうらふひとく
ゆん覚悟せよといひつ黒髪をころし引倒せば姫の苦しきとく

いのうらふ人のくたそけつよとくひてよとくけべも物とくまがくあられ
夜の空吹風ふるたけける雁の色のうら誰答る人りあくやとく危くええ
まらりとく又弥陀二部へのら當國小くう栗生野の光明寺小寄宿
しけり主君義治信田平太夫お打と家亡しとせとく大お悲く何とくど
平太夫と打家を再真とくと思ひ五三昧をめぐる修行者とあうらとく世こ
ふかくとく時のいれぬまら同志の義士をぬかすひくがけ夜け
三昧小くうら此菴のうらふ女のさけぶ色をれをの中と垣の外おたどと
くやうまお窺うれが様ひめと叫色ぬやとく面おと知とくいへも主君の
姫君さる夏を知り大お驚くうらふ走り入清玄をひたのけて姫かこひ
色あらしふいしとく汝法師の身とくあつたあまひくまやりあも仏
体を学ぶ身とくあられはけ終小免しとくおとくおとくおとく



彌陀二部 謀
清玄の亡霊
後髪と
ひた
ゆんとして
姫を扶けて逃

清玄かへへいりぬき姫をばえとそとくまじりて
天魔の足つて世に我をば今に何をさしよぶたらしむけ身を生皮を剥れ
臊子小切まきもかきまきぐさひらきとれ一念変まじりぬとくも
捺落は沈む身あり姫をもちりお連ゆんといひくぬれおめけておろり
けいぶ弥陀二郎せんまきく杖おちらじ戒刀を抜く鉦打は打ちぬ
手さねまらりく肩尖ふく斬るけいぶ一色阿と叫て倒伏弥陀二郎
られぬまじりぬ誤一くおぬ殺生不便まよきものまき姫の清牙あひか
がじと口裏ふ念仏しるまじり姫の手ととり馳出けぬが清玄朱おと
まじりしりと起上りくひらふまじりぬある怖しや腹とちや目前修羅の
苦とるる誰お名ど姫お名お生ある地獄お墮とるけ根に生うり死
らりあひあきまきくかへへとていひつ姫おめぐりくかけよれば二郎

今へ止とぬ得と死めらる斬つてさるれ倒る其ひまふ姫と侍
ゆきとて又立上りくかけよるまじりぬとれ眼の光りかき
まきまきおろりあけく法師おも似ぬ執念のふうた奴めまるとく又斬つ
とて合破となぬれ姫へ袖も裾もくひらきとれ夢路をたられらる歩
ひらき所か一天俄ふく曇大雨車軸をまじり暴風林をたふまきとて
まきまじり光景あり風雨益烈しとて髪も裾もくひらきとて吹戻れ
走れおもにいられど背後の方お顧が一團の心火炎く燃あぐれとち
のやいやとゆき所小清玄が安柳の梢おめつれくまやもかじと
りしり髪お引戻と二郎いりぬな一刀おをけく切ぬ姫お背負
ゆきとてかきぬのくれゆきぬ誠不危とてまきとて

